南アフリカ、ヨハネスブルグのチャイナタウンの形成と変容 ―新旧のチャイナタウンの比較考察―

山 下 清 海*

キーワード:チャイナタウン、華人、新華僑、チャイナモール、ヨハネスブルグ、南アフリカ

I はじめに

世界各地に多数のチャイナタウンが形成され、特定のチャイナタウンの事例研究も多くなされている(Wong and Tan eds. 2013)。しかし、グローバルな視点から、世界のチャイナタウンを比較研究し、それらの共通する特色や地域的特色を考察した研究は乏しい。筆者は人文地理学的な視点から、世界各地のチャイナタウンの事例研究を行うとともに(山下 1987, 2000, 2002, 2016a)、各地のチャイナタウンを相互に比較考察し、世界のチャイナタウンの類型化を試みてきた(山下 2019)。

1978年末以降の改革開放政策の実施後、海外へ移り住む中国人が急増した。彼らは中国では「新移民」と呼ばれる。新移民は、移住先、ホスト社会への適応様式などにおいて、以前から海外に居住していた、いわゆる「老華僑」とは大きく異なる。本稿では、「新移民」と「老華僑」を比較するために、「新移民」のことを「新華僑」と呼ぶことにする。中国では中国籍を保持しながら海外に居住している者を「華僑」と呼び、中国以外の国籍を取得した者を「華人」と呼んでいる。一方、東南アジアでは、中国籍の有無にかかわらず、海外に居住する中国系住民を、一般に「華人」と呼んでいる。本稿においても、「老華僑」と「新華僑」の両者の総称として「華人」を用いることにする。

従来、アフリカ(アフリカ大陸および周辺のマダガスカルなどの島嶼を含む)の華人研究では、老華僑が多かったインド洋上のモーリシャス、レユニオン島などに関するものが主であった。筆者自身もモーリシャスの首都ポートルイスのチャイナタウンや華人社会の地域的特色に関する調査を行った(山下 2015)。しかし、今日、世界の中でも新華僑の急増が著しいのはアフリカ大陸である。改革開放後、中国政府のアフリカ重視政策に伴って、南アフリカを除き、いわば華人空白地帯であったアフリカ大陸各地に、多数の新華僑が移り住んでいる。こ

のようなアフリカ大陸における新華僑の実態については、マスメディアで注目されているが(ミッシェル・ミッシェル 2009:山下 2016b:バージェス 2016)、アフリカの新華僑に関する研究はまだ少ない。そのような中で、アフリカへの中国製品の流入とその背景などについて論じた丁(2007)や、南アフリカの隣国、ボッワナにおける華人経営のチャイナモール(後述する)を通しての新華僑とボッワナの人々との相互関係を考察したZi(2017)の成果は貴重である。

本稿では、アフリカの中でも、最大の華人人口を有する南アフリカの最大都市ヨハネスブルグ¹⁾の華人社会の変容と地域的特色を明らかにすることを目的とする。

このために、本稿では、ヨハネスブルグにみられる新旧のチャイナタウンに着目する。世界のチャイナタウンは、老華僑によって形成されたチャイナタウンと、新華僑によって形成されたチャイナタウンに二分される。筆者は前者をオールドチャイナタウン、後者をニューチャイナタウンと呼んでいる(山下 2016c)。ヨハネスブルグのCBD(中心業務地区)には老華僑によりオールドチャイナタウンが形成されたが、近年、治安の悪化により衰退している。一方、ヨハネスブルグ東郊には新華僑の増加に伴いニューチャイナタウンが形成されている。これら新旧のチャイナタウンの形成と変容を、現地調査により考察する。

次に、一般にチャイナモール(China mall、中国語:中国商場)と呼ばれる新華僑経営の店舗が集中するショッピングモールが、ヨハネスブルグの市内各地に形成されていることに着目する。これらチャイナモールは、新華僑の重要な経済活動の場であるとともに、居住・生活の場でもある。このようなチャイナモールもニューチャイナタウンの一つの類型であり、旧社会主義国の東ヨーロッパで多く見られ、筆者はモール型チャイナタウンと呼んでいる(山下 2016a:103-106;山下 2019)。

なお、ヨハネスブルグにおける現地調査は、2018年9

^{*} 立正大学地球環境科学部

月に実施した。ヨハネスブルグの治安が悪いことはよく知られており、CBDにあるチャイナタウンは世界一危険なチャイナタウンともいわれるが、人文地理学研究者としては、現地調査を行わずして研究はできないので、事前に多くの情報を収集したうえで、十分注意しながら土地利用および景観の調査を行い、現地在住の華人から聞き取りを行った。

ヨハネスブルグの華人社会に関する研究では、文献に基づく研究が多い中で、現地に長期滞在した経験にもとづく吉田 (2011, 2013) の研究は、新旧のチャイナタウンを調査するうえで、非常に参考になった。また、華人に関する研究ではないが、宮内 (2016) は、ヨハネスブルグの治安が悪いインナーシティにおいて、民間都市再開発プロジェクトを例に、現地調査により新たな包摂と排除のメカニズムを明らかにしており、ヨハネスブルグのCBDの変容についてきわめて重要な成果と言える。

■ 南アフリカおよびヨハネスブルグにおける華人 社会の形成

先行研究にもとづき、南アフリカにおける華人の歴史的変遷の概略を整理しておきたい(宮本・松田編 2018:387-400)。主に香料取引で東南アジアとのアジア航路の開拓を目指したオランダは、1596年、初めて「東インド」のジャワ島に到着した。1619年、オランダはバタビア(現ジャカルタ)を獲得し、東インドにおける貿易と植民地経営の根拠地とした。東インド航路の補給基地として、ケープがオランダの植民地都市となった。その後、第4次英蘭戦争(1780~84年)でオランダは惨敗した。1814年から正式にイギリス領ケープ植民地となり、1820年にはイギリスから約5,000人の移民が送り込まれた。

17世紀、南アフリカの華人は、中国の広東や東南アジアから来た者、およびオランダの東南アジア植民地が放出した華人であった。20世紀初め、南アフリカで金が発見され、金鉱山での労働力不足により、中国から契約労働者が求められるようになった。南アフリカにおける華人の起源として、3つに分類できる。すなわち、①中国および南アジアの自由移民、②オランダ領の東南アジア植民地から来た華人、そして③契約労働で南アフリカに来て契約終了後も残留した華人である。これらの中で、最も早く南アフリカに到着した華人は、オランダ領の東南アジアから連れて来られた華人の囚人で、1660年に到着したという記録がある。1814年から1882年の間、約300人の華人が南アフリカに送られ、大部分は植民地

政府に雇用された職工や労働者であった。また、1904年、イギリスと中国の間で結ばれた「保工章程」により、1904~10年の間に約6万4千人の華人契約労働者が、南アフリカ戦争(1889~1902年)後、イギリス領植民地となったトランスバールに来た。しかし、契約期間終了後、ほとんどの華人は中国に帰国した。20世紀初め、南アフリカに定住した華人は2,500名に至らなかった(李2006)。

第二次世界大戦後、南アフリカの中国大陸出身の移民がしだいに増加した。1945~1952年、中国大陸から南アフリカに渡った華人は346人で、1953~1962年には7人、1963~1973年には17人、1974年には49人であった。1976年、台湾と南アフリカが外交関係を樹立して以降、台湾からの来住者が増加した。南アフリカに来た台湾人は、1980~1989年には935人、1990年には、1年間だけで1,442人になった。1994年に、南アフリカに来た869人の華人のうち、596人が台湾人で、中国大陸出身者は252人、香港人は21人であった。1994年時点では、南アフリカ在住華人の総数は3万人で、そのうち老華僑が7千人あまりで、中国大陸出身者および香港人が7千~8千人、台湾出身者は1万5千人であった(万 2007)。

南アフリカの人種隔離制度・政策であるアパルトへイト下では、南アフリカの住民は白人、黒人、カラード(白人と有色人種の混血)に区分されたが、カラードはさらにマレー人、インド人、華人に細分された。華人は白人への分類を求めたが、大多数がかかわる商業部門での隔離を意味しないことを条件に独立の分類を受け入れた。1969年、華人には商売、居住を目的とするあらゆる人種地域への立ち入りが認められた(ハリス 2012)。

1980年代、改革開放政策に伴い中国大陸出身者が増加した。南アフリカ政府も、移民受け入れの政策をとった。また、1997年の香港の中国返還への不安から、海外へ移住する香港人が増え、カナダ、アメリカ、オーストラリアへ移住する香港人が増加し、南アフリカも主要な移住先となった。

前述してきたように、1998年以前、南アフリカに居住する中国大陸出身の華人は少数で、台湾人および香港人が主であった。1998年から2000年にかけて、中国大陸出身者が増加し、南アフリカの入国管理当局によれば、2000年代半ば、南アフリカ在住華人は20~22万人前後に増加し、その中で福建人(5~6万人)が最も多く、後述するヨハネスブルグのニューチャイナタウン周辺に居住する華人は6万人あまりと推定されている²⁾。南アフリカに在留する華人に関する統計は公表されていない。このため、公的機関や関係者が公表する断片的な推計人

口などが引用されることが多い。

2006年当時、合法的に南アフリカに在留する華人は約10万人、そのほか10~20万人の華人が南アフリカに滞在しており、華人の不法移民は10万人と推定されていた³⁾。2011年の南アフリカの人口センサスによれば、ヨハネスブルグの総人口は4,434,827人であり、人種別の割合をみると、黒人(Black African) 76.4%、白人(White) 12.3%、カラード〔混血〕(Coloured) 5.6%、インド人・アジア人(Indian/Asian) 4.9%となっていた⁴⁾。華人は、このインド人・アジア人に含まれるが、その内訳は公表されていない。

アフリカの華人社会に関する研究では、李安山の一連 の研究が評価できる。李(2017)は1990年から2010年 における急変するアフリカの華人経済について考察し た。その中で、アフリカを3つの地域に分けて論じてい る。すなわち、①老華僑が多いインド洋西部地域(モー リシャス、マダガスカル、レユニオン、セーシェル、コ モロなど)、②1980年代に台湾出身の華人が支配的で あった南部アフリカ(南アフリカ、レソト、スワジラン ド、アンゴラ、モザンビーク、ジンバブエなど)、そし て③1960~1970年代に香港人がいち早く投資を行った西 部アフリカ(ナイジェリア、ガーナ、リベリア、ガンビ ア、コートジボワール、ニジェール、ギニア、セネガル、 トーゴなど)である。前述したように、1976年に南アフ リカが台湾と外交関係を結んで以降、台湾人の南アフリ カへの流入が増加し、香港人や東南アジアの華人の南ア フリカへの投資も盛んになった。しかし、1998年に南ア フリカが台湾との外交関係を放棄し、中華人民共和国と の国交を樹立して以降は、中国大陸出身の新華僑が増加 したことなどを指摘している。

Ⅲ ヨハネスブルグCBDにおけるオールドチャイナ タウンの変容 一ファースト・チャイナタウン—

長年のアパルトヘイト反対運動により、1994年、初の全人種参加の総選挙が実施され、ネルソン・マンデラが大統領となり、アパルトヘイトは正式に終了した。しかし、ヨハネスブルグの今日の都市構造においても、アパルトヘイト時代の特色は強く反映されている。

宮内(2016:8-14)は、ヨハネスブルグの今日の都市空間を、①インナーシティ(旧都心)、②アウターシティ(北部郊外)、および③タウンシップ(旧黒人居住区)の3つに分類している。これらの3つの都市空間の特色を、宮内の説明にもとづいて、以下、概説する。

ヨハネスブルグの①インナーシティは衰退し、大企業は金融・鉱山企業本社などを残すのみとなり、そこに大量の移民が集住し、住環境も悪化した。この地域の「不法居住」アパートには、大量の移民がすし詰め状態で暮らしている。中心業務地区(CBD)は、民主化後、衰退の一途をたどっている。なお、2000年代に入り、インナーシティ再生の機運が高まり、マボネン(Maboneng)地区のように再び投資も始まって、脚光を浴びている。

次に、②アウターシティには、CBDにあった大企業のオフィスが移転し、中間・富裕層の閑静な住宅街とゲーテッド・コミュニティが散在している。人口密度も低く、自家用車による移動が主となっている。ヨハネスブルグの北部のサントン(Sandton)やローズバンク(Rosebank)には、新都心が形成された。

最後に③タウンシップは、低所得者層向けのRDP(復興開発計画)住宅とスラムが広分布している。アパルトヘイト体制によって形成されたソウェト(Soweto)などの旧黒人居住区は、CBDの南側郊外に広がっている。

衰退するCBDの近くに、華人店舗が集積するチャイナタウンが形成された(写真 1、図 1)。ヨハネスブルグのCBDのシンボルとなっているカールトンセンターの西約 1 kmのところに、ヨハネスブルグのオールドチャイナタウンが位置している。CBDを東西に貫くコミッショナー・ストリート(Commissioner St.)の両側、200m足らずの長さで、最盛期には30あまりの店舗があった(写真 2)。しかし、治安の悪化 5)とともに来客も減り、店舗は夜 7 時には閉店するようになり、店舗数も減少していった 6)。



写真1 ヨハネスブルグのCBD

カールトンセンター(高さ223m、50階建て)の最上階の展望台からファースト・チャイナタウンがある西方を望む。写真左上には、チャイナモールが集中するクラウンシティが位置する。

(2018年9月、筆者撮影)



図1 ヨハネスブルグのチャイナタウンの分布 (2018年9月の現地調査により筆者作成)



写真2 ファースト・チャイナタウン

コミッショナー・ストリートの両側に華人店舗、団体が 立地し、道路を挟んで龍のモニュメントが対をなしてい る。写真右側の3階建ての建物がトランスバール中華会 館(杜省中華会館)。

(2018年9月、筆者撮影)

このオールドチャイナタウンは、現地では「ファースト・チャイナタウン」(First Chinatown) と呼ばれ、中国語では「第一唐人街」あるいは「老唐人街」(Old Chinatown) と表記される(写真3、4)。本稿では、ファースト・チャイナタウンと呼ぶことにする。

図2は、ファースト・チャイナタウンの華人関係の施設・店舗の分布を示したものである。ファースト・チャイナタウンのシンボル的な建物は、3階建ての茶色のビル、トランスバール中華会館(中国語名:杜省中華会館、英語名:Transvaal Chinese Association Building)

である。このトランスバール中華会館は、華人社会の団 結を強化し、華人の共同利益を守り、政府の政策に対応 することなどを目的に、1903年に創立された。トランス バール地方の華人社会(1905年6月現在、1.115人)に おいて重要な役割を果たした。トランスバール中華会 館は、南アフリカ政府が発布したアジア人法改正条例 (Asiantic Law Amendment Ordiance, No.2 of 1907) に反対したが、この条例に対し、会館内部で妥協派と反 対派に分裂し、1909年には両派が暴力衝突を起こした。 1909年、妥協派はトランスバール中華会館を離れ、杜 省華僑聯衛会所(The Transvaal Chinese United Club) を結成した。同会所はその後継続して発展し、1990年 代初め、会員は2,000人あまりとなり、南アフリカで最 も成功した華人団体の一つになった(周 1999a, 1999b)。 図2に示したように、杜省華僑聯衛会所はコミッショ ナー・ストリートの南側に位置している。



写真3 ファースト・チャイナタウンの龍のモニュメントおよびファースト・チャイナタウンの歴史の説明文と写真

英語の説明文の反対側には、中国語の説明文がある。 (2018年9月、筆者撮影)

THE STORY OF "FIRST CHINATOWN" 2

By the early 1900s at least three major Chinese clubs – the Cantonese Club, the Chee Kung Tong and the United Club – were established in this area. Members met socially, gambled, dined, wrote letters, helped one another and received news from China.

The Transvaal Chilese Association was formed in 1903 to protect the interests of the Chinese. They opposed the Asiatic Law Amendment Act of 1907 and rallied behind Mahatma Gandhi's campaign to resist compulsory registration, facing both imprisonment and deportation. The Passive Resistance Campaign united the Chinese and Indians against a common oppression in the early 1900s.

Between 1904 and 1910 over 63,000 Chinese mine labourers were contracted to work on the Witwatersrand mires. Their sojourn in South Africa was short-lived but they revived the economy to restore the mines to their position as the world's largest single producer of gold. On their days off from the compounds they were seen on these streets riding rickshaws and bicycles and frequenting eating houses and gambling dens.

Text by

Melanie Yap, Dianne Leong Man, Jackson Leong and Sandra Ho

第一唐人街的故事 2

早在1900年間己有三大會堂在"馬拉金" 地區成立起來, 計有" 致公堂" " 維益社" 與及" 聯衛會所". 會友在此舉行社交活動, 賭博, 敘餐, 代寫家書, 互相解難及傳遞家鄉訊息等.

於1903年, 杜省中華公會亦相繼成立了, 它成立的宗旨是要維護全僑的利益, 它曾發動反對政府於1907年頒佈的對亞洲人法例的修改, 並支持及聯盟參加印度藉甘地先生組織的抗拒政府對亞洲人強迫登記的苛例陣線, 導致雙方僑民都有被政府監禁及驅逐出境. 早在1900年的抗苛運動團結了印僑與華僑的合作.

在1904年至1910年間,超於六萬三仟華人簽約來到"白水嶺"礦場當勞工,雖然他們在這裡客居是短暫的,但他們於當時卻振發及恢復了開發金礦的偉業並居於全世界各地出產黃金產量最高的地位.他們在休閒時,常常乘坐人力車及自騎腳踏車來往在"馬拉金" 地區出入於食肆或賭博場所等.

写真4 ファースト・チャイナタウンの英語・中国語による説明文

写真3の説明文を拡大したもの。(2018年9月、筆者撮影)



図2 ヨハネスブルグのファースト・チャイナタウンの 華人関係店舗・施設

(2018年9月の現地調査により筆者作成)

現在、トランスバール中華会館の前には、高さ3mの龍の塔が建てられており(写真2、3)、コミッショナー・ストリートを挟んだ向かい側にもあり、両方で対をなしている。龍の像の側面には、ファースト・チャイナタウンの歴史を書いた説明や写真の案内プレート(英語と中国語)があり、ファースト・チャイナタウンの歴史を説明した「第一唐人街的故事」が書かれている(写真4)。これらの説明によれば、1904~1910年、6万3千人を超える華人が、ここ「馬拉金」地区で働いていたとある。コミッショナー・ストリートをさらに西側に進むと、中国料理店「同楽酒楼」(Tong Lok Restaurant)がある。

コミッショナー・ストリートの南側には、ファースト・チャイナタウンを代表する老舗中国料理店「燕子酒家」(Swallows Inn Chinese Restaurant)がある(写真5)。筆者の訪問時、営業中を示す"OPEN"のプレートが入り口に掲げられていたが、治安に配慮してか、少



写真5 ファースト・チャイナタウンの老舗中国料理店 「燕子酒家」

(2018年9月、筆者撮影)

し開いたドアにはチェーンがかけられたままであった。 その東隣の「廣州焼腊」の看板を掲げた店は、元は広東 式焼肉の専門店だったと思われるが、現在は、野菜、魚、 肉、雑貨、食品などの中国食品雑貨店となっている。

Ⅳ ヨハネスブルグの郊外型ニューチャイナタウン ーシリルディン・チャイナタウン―

前述したように、ファースト・チャイナタウンの治安の悪化に伴い、老華僑の店舗は、しだいに東郊のシリルディン(Cyrildene、中国名:西羅町)に移動した。1998年、中国と南アフリカは外交関係を樹立し、これに伴い中国から南アフリカへの移住者が急増した。彼ら新華僑は、治安が悪化したファースト・チャイナタウンではなく、郊外のより安全な地区に居住した。この地区には新華僑も継続して流入し、アメリカ合衆国やカナダの大都市近郊で見られるような郊外型ニューチャイナタウ

ンが形成されていった 7 。2006年当時、ヨハネスブルグにおける中国人集住地区は、シリルディン(中国語名:西羅町)などヨハネスブルグの東郊にあった 8 。

シリルディンは、ヨハネスブルグの中心部から北東 約6kmの郊外に位置する(図1参照)。シリルディン 周辺には、3万5千人の華人が居住すると言われている。その中心は、南北に伸びる長さ約610mのデリック・アヴェニュー(Derrick Ave.、中国語名:西羅町大街)である。2005年末、「ヨハネスブルグ・チャイナタウン」(Johannesburg China Town、中国語名:約翰内斯堡唐人街)としてヨハネスブルグ市に公式に登録された。このチャイナタウンは、公的機関に登録されたアフリカ最初のチャイナタウンである。本稿では、主に新華僑によって形成されたこの郊外型ニューチャイナタウンを、シリルディン・チャイナタウンと呼ぶことにする。

2011年当時、シリルディン・チャイナタウン周辺には、スーパーマーケット、中国料理店、ホテル、書店、ネットカフェ、理髪店、美容院など81の店舗があった。香港人や台湾人が経営する少数の店舗を除くと、大部分は中国大陸出身者が開設したものであった⁹⁾。

治安が悪いファースト・チャイナタウンに比べると、郊外に位置するシリルディン・チャイナタウンの治安はまだよい方である。しかし、2003年には華人が殺される事件が発生したため、シリルディン・チャイナタウンの中心的な華人団体である唐人街管理委員会は、15名の警備員を雇用して、チャイナタウンの保安に努めるようになった¹⁰。

シリルディン・チャイナタウンには、デリック・アヴェニューの南北に2つの牌楼がある。北側の牌楼の建設工事は2011年11月に始まり、2013年6月に完工した。同年10月には、南アフリカのズマ大統領も出席して、牌楼の落成式が行われた¹¹⁾。完成した牌楼は、高さ21.5 m、幅27.5mで、唐代、宋代の建築様式を融合したもので、アフリカ最初の「中華牌楼」であった。この牌楼には「約翰内斯堡唐人街」(ヨハネスブルグ・チャイナタウン)と書かれている(写真6)。南アフリカ大統領の牌楼落成式への出席は、南アフリカ・中国の両政府の良好な関係を象徴している。1995年、現在のシリルディン・チャイナタウンの位置に初めて中国店舗が開業し、特に2000年以後、華人店舗が増加していった¹²⁾。南側の牌楼は、当初、2014年の完工予定であったが、筆者が訪れた2018年9月、まだ建設工事が続いていた(写真7)。

次に、筆者の現地調査にもとづき、シリルディン・ チャイナタウンの概略を示したものが図3である。この



写真6 シリルディン・チャイナタウンの北側の牌楼 牌楼の中央には「約堡唐人街」(ヨハネスブルグ・チャイナタウン) と書かれている(写真左上参照)。 (2018年9月、筆者撮影)



写真7 シリルディン・チャイナタウンの南側の牌楼 (工事中)

デリック・アヴェニューの両側に華人店舗が並ぶ。 (2018年9月、筆者撮影)

図に示したようにデリック・アヴェニューの両側だけで、 筆者の調査では中国店舗・団体が38軒認められた。この ほか、店舗の2階、3階などに「住宿」と書かれたゲス トハウスやマッサージ店なども見られる。シリルディ ン・チャイナタウンでは、「超市」の看板を掲げたスー パーマーケットと中国料理店が中核をなしている(写真 8)。

「超市」は、中国語の「超級市場」の略語であり、スーパーマーケットを意味するが、シリルディン・チャイナタウンの超市は、日本で見られるような比較的規模の大きなスーパーマーケットではなく、いずれも小型であり、一般の雑貨店などの中にも「超市」の看板を掲げているものもみられる。超市の中でも、「台北人超市」は、もともとファースト・チャイナタウンにあり、シリルディン・チャイナタウンに移転してきたものである(写真9)。いずれの超市でも、商品を搬入する車両と店内に商品を運ぶ従業員が各所でみられる。これらの従業

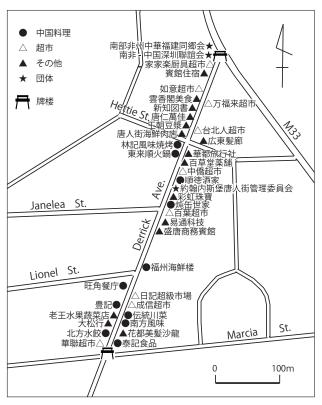


図3 ヨハネスブルグのシリルディン・チャイナタウン (2018年9月の現地調査により筆者作成)



写真8 シリルディン・チャイナタウンの華人店舗店舗前は歩道が設けられている。どの店舗も、防犯のために鉄格子が取り付けられている。 (2018年9月、筆者撮影)



写真 9 台北人超市

「超市」は超級市場(スーパーマーケット)を意味する。 台北人超市はファースト・チャイナタウンにあったが、 治安の悪化によりシリルディン・チャイナタウンに移転 してきた。

(2018年9月、筆者撮影)

員は華人ではなく、黒人やカラードである。また、チャイナタウンでは、この地区の保安のための警備員や、来訪者の車を道路脇や屋外の駐車場に案内する担当者も、 黒人やカラードであり非華人である。

シリルディン・チャイナタウンへはバスや電車などの公共交通手段はなく、ここを訪れる者は自家用車かUber(ウーバー)のような配車サービスを利用することになる。筆者自身も、宿泊先のサントンのホテルからシリルディン・チャイナタウンまではタクシーを利用した。しかし、ここにはタクシースタンドはなく、流しのタクシーもつかまえられない。このため筆者は、華人の商店に飛び込んで華人が運転する自家用車を呼んでもらった。

華人関係の団体としては、北側の牌楼の傍に、「南部非洲中華福建同郷会」と「南非 - 中国深圳聯誼会」がある。シリルディン・チャイナタウンでは、春節のイベント(中国語:唐人街大拝年、英語:Chinese New Year Festival)が、ヨハネスブルグ唐人街管理委員会の主催で開催されている(写真10)。旧暦元旦から1月15日の元宵節まで、デリック・アヴェニューは車両の通行が禁止され、爆竹とともに龍舞や獅子舞などで賑わう¹³)。



写真10 シリルディン・チャイナタウンの2018年 春節のポスター

「唐人街大拝年」(Chinese New Year Festival) は、ヨハネスブルグ唐人街管理委員会の主催で開催されている。 (2018年9月、筆者撮影) また、このチャイナタウンには、華人の子どもたちに 中国語を教える「西羅町華語中文学校」やバイリンガル (中国語と英語)の幼稚園、「西羅町双語幼児園」もある。 デリック・アヴェニューに掲げられていた看板には、以 下のように書かれていた(一部、日本語に訳した)。

西羅町華語中文学校

中文日常班 月~金16:00~17:30

土曜班 数学8:30~10:00

中文 $10:00\sim12:00$ 、 $14:00\sim16:30$

西羅町双語幼児園

V ヨハネスブルグのモール型チャイナタウン ーチャイナモールー

ヨハネスブルグには、規模の大きさには違いがあるが20近くの「中国商場」がある¹⁴⁾。中国語の「中国商場」とは、海外在住の華人が経営する店舗が集まってできたショッピングモールのことで、南アフリカ周辺のジンバブエ、マラウイ、ボツワナ、モザンビークをはじめアフリカ各国で多く見られ、一般には「チャイナモール」(China mall)と呼ばれることが多い。以下、本稿でもチャイナモールと呼ぶ。

筆者は、世界各地のチャイナタウンの一つの類型として、モール型チャイナタウンと呼んでいる。チャイナモールで働いている華人の多くは、モールの近隣あるいはモール内の宿舎に居住し、華人の日常生活空間はモールを中心に展開されている。このようなモール型チャイナタウンは、治安に問題があるアフリカに多くみられるが、東ヨーロッパの旧社会主義国のポーランド、ハンガリー、ルーマニアなどでもみられる(山下 2016a:103-106:山下 2019)。

1990年代初期、南アフリカの華人はまだ多くはなく、中国商品も少なかったため、当時のチャイナモールのビジネスは収益性が高かった。しかし1998年、中国と南アフリカの国交締結以降、中国製の商品が、南アフリカ市場に大量に搬入されるようになった。特に南アフリカの中・低所得層向けの種類豊富な商品の需要が高まった。これに伴いチャイナモールの開業が急増し、同時にチャイナモール間の競争も激化した¹⁵⁾。

チャイナモールでは、中国から輸入した多種多様な商品が販売されている。例えば、衣類、手工芸品、靴、帽子、家具、カーテン、カーペット、玩具、文具、電気製品、時計、大工道具、工具、調理具などがある。チャイ

ナモールの顧客の多くは華人以外の人々であるため、華 人店舗では、販売員として現地人を雇用している。

ヨハネスブルグのCBDのファースト・チャイナタウンの西南約 $2 \, \mathrm{km}$ にクラウンシティ(Crown City)と呼ばれる地区がある(写真 $1 \, \mathrm{および図} \, 1 \, \mathrm{参照}$)。このクラウンシティには、百家商城(China Mart)、中国商貿城(China Shopping Centre)、華夏商城(Everbest Mall)などのチャイナモールが集中している。

百家商城のホームページによれは、2003年に建設さ れ、120の店舗が入っている160。百家商城の入口には、 "Welcome To China Mart" (中国語表記はない) と書 かれたゲートがあり、出入りする車はゲートで停止され、 自動小銃を手に構えた複数の警備員(非華人)から安 全チェックを受けなければならない(写真11)。これは、 各地のチャイナモールが強盗集団にたびたび襲われたこ とで、厳重警戒が行われているためである。筆者が百家 商城の入口の写真をカメラで撮っていると、自動小銃を 構えた警備員が大声で「撮影するな!」と叫んだ。下手 に逃げたりすると危ないので、私の方から警備員に近寄 り、英語で怪しい者ではないと話したが、警備員は私を 警備責任者のところへ連行した。その責任者は華人で あったので、私は、中国語で日本から来た旅行者だと説 明すると、すぐに理解してくれた。「ヨハネスブルグは 治安が悪いから気を付ける。お前の恰好は、すぐによそ 者とわかるので狙われるぞ」と注意してくれた。



写真11 クラウンシティのチャイナモール「百家商城」 のゲート

自動小銃を携帯した警備員が厳重に警戒している。 (2018年9月、筆者撮影)

百家商城の内部には、赤いレンガ造りの倉庫のような建物が3棟あり、それぞれA、B、Cの3つのブロックに分かれている(写真12、13)。各建物の内部には、華人経営の商店が通路の両側に並んでいる(写真14)。顧客は華人ではなく、南アフリカやその周辺国から買い付けに来た非華人の卸売業者が主体である。



写真12 百家商場の案内表示

周囲は高い塀で囲まれ、内部の華人店舗はA、B、Cの3ブロックに分かれている。

(2018年9月、筆者撮影)



写真13 百家商場のブロックAの外観 (2018年9月、筆者撮影)



写真14 百家商場のブロックの内部

華人店舗が通路の両側に並ぶ。各店舗は非華人を従業員として雇っている。

(2018年9月、筆者撮影)

中国商貿城(写真15)では、2013年10月、在南アフリカ中国大使館や在ヨハネスブルグ中国総領事館、南アフリカ警察庁などの要人を招いて、牌楼および華人用アパート(「華人名人公寓」という)の完成式典を挙行した¹⁷⁾。中国商貿城も百家商城と同様に警備が厳重で(写真16)、施設内を多くの警備員が自動小銃を構えながら巡回している。



写真15 クラウンシティのチャイナモール「中国商 貿城」(China Shopping Centre)

写真は家庭用品の店舗。構内では自動小銃をかまえた警備員が頻繁に巡回している。

(2018年9月、筆者撮影)



写真16 中国商貿城のゲート

チャイナモールの中に入る車は、このゲートで自動小銃 を構えた警備員のチェックを受ける。

(2018年9月、筆者撮影)

Ⅵ おわりに

アフリカにおける華人社会の研究は、まだ蓄積が少なく、文献中心の研究が多い。そこで筆者は、アフリカでもっとも多くの華人が在住する南アフリカの最大都市ヨハネスブルグを対象に現地調査を行った。華人社会の中でも特にチャイナタウンに焦点を当て、ヨハネスブルグの新旧のチャイナタウンの形成と変容について考察することを目的とした。

世界のチャイナタウンは、おもに老華僑によって形成 されたオールドチャイナタウンと新華僑によって形成さ れたニューチャイナタウンに分けることができる。ヨハネスブルグにおいては、CBDの近くに形成されたファースト・チャイナタウンがオールドチャイナタウンである。近年のCBDの治安の悪化により、オールドチャイナタウンは衰退し、増加している新華僑もここに集中することはなかった。

新華僑は、治安が悪いヨハネスブルグ中心部を避けて、 東郊に多く居住した。中でもシリルディンに新華僑が集 住し、ニューチャイナタウンが形成された。新華僑の多 くは中国出身であり、中国・南アフリカの政治的関係の 強化に伴い、シリルディン・チャイナタウンは、公式に 「ヨハネスブルグ・チャイナタウン」と認められ、牌楼 も建設された。

もう一つの新華僑による新しいチャイナタウンの形成がチャイナモールである。中国から輸入した様々な商品を現地向けに販売する中国出身の新華僑が経営する店舗が集まったショッピングモールである。南アフリカでは治安が悪いため、これらのチャイナモールは高い塀で囲まれ、ゲートには自動小銃を構えた警備員が警戒している。チャイナモールの中は、華人の居住・生活の場ともなっている。

ヨハネスブルグでは、上述したような3つの類型の チャイナタウンを確認することができた。オールドチャ イナタウンの衰退やチャイナモールの厳重警備も、治安 悪化というヨハネスブルグの地域的特色を反映している といえる。

付記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究B(一般)「地域活性化におけるエスニック資源の活用の可能性に関する応用地理学的研究」(課題番号:17H02425、研究代表者:山下清海)の成果の一部である。

注

1) ヨハネスブルグ (Johannesburg) の日本語呼称については複数存在する。英語読みにするかアフリカーンス語 (オランダ語から派生) 読みにするかで異なってくる。例えば、日本の高校の地理教科書や地図帳では、両者を混合して「ヨハネスバーグ」と表記している。南アフリカ研究の日本人専門家の間では「ジョハネスバーグ」が用いられることが多い (例えば、峯編 2010)。一方、新聞やテレビ、日本の外務省、また一般読者を想定したアフリカの歴史書(宮本・松田編 2018) でも、「ヨハネスブルグ」が用いられている。本稿では、従来からの慣用にならって、「ヨハネスブルグ」と表記する。

2)「新華社記者非洲行:南非唐人街紀行」新華網、2006年 9月22日。

http://news.sina.com.cn/w/2006-09-22/110410084195s. shtml (最終閲覧日:2018年12月5日)

3)「以血光告終的長征 中国移民潮攪乱南非僑界」大起元、 2006年8月27日。

http://www.epochtimes.com/gb/6/8/27/n1435741.htm (最終閲覧日:2018年12月5日)

4) Statistics South Africa

http://www.statssa.gov.za/?page_id=993&id=city-of-johannesburg-municipality(最終閲覧日:2018年12月5日)

- 5) ヨハネスブルグ中心部の治安の悪さについては、日本の旅行ガイドブックでも、旅行者に強く注意を促している。『地球の歩き方 南アフリカ2018~2019年版』(ダイヤモンド・ビッグ社、2018年、p.211)では、「ヨハネスブルグ中心部へは、決して興味本位で行ってはいけない。また、中心部以外のエリアであっても、現地をよく知っている信頼のできる人と一緒でないのなら、町なかを歩くことはよほどのことがないかぎり避けるべきだ」と、この「」の部分を太字で強調している。
- 6) 筆者がファースト・チャイナタウンを調査している時、コミッショナー・ストリートの歩行者は黒人のみであった。この地区の治安の悪さに関する情報はインターネット上でもよく目にする。筆者は、目立たないようにカメラではなくスマートフォンのカメラですばやく写真を撮り、店舗・施設の分布を地図に書き込んだ。それでも、歩いている筆者に後ろから近づいて来て、「私は保安員だから心配するな。どこに行くんだ」と声をかけてきた青年がいた。下手に返事をすると、相手に筆者が外国人で、現地の状況に疎いという情報を与えてしまうことになるので、"Sorry"と一言だけ言って、早足でその場を去った。
- 7) 前掲2) 参照。
- 8) 前掲3) 参照。
- 9)「南非約堡西羅町:世界最年軽的唐人街」和訊網〔来源:文匯報〕、2011年1月30日。

http://m.hexun.com/news/2011-01-30/127117760.html(最終閲覧日:2018年12月5日)

- 10) 前掲2) 参照。
- 11)「南非約翰内斯堡唐人街中華牌楼落成剪彩儀式隆重挙行」 中華人民共和国駐約翰内斯堡総領事館。

http://johannesburg.china-consulate.org/chn/zxxx/t1089954.htm(最終閲覧日:2018年12月5日)

12)「非洲堅起首座"中華牌楼"南非総統出席剪彩儀式」中 国新聞網、2013年10月12日。

http://www.chinanews.com/hr/2013/10-12/5367894.shtml (最終閲覧日:2018年12月5日)

13)「約翰内斯堡"唐人街"的由来」南非華人網、2016年10月29日(来源:非洲時報)。

http://www.nanfei8.com/huarenzixun/huarenzixun/ 2016-10-29/37569.html(最終閲覧日:2018年12月5日)

- 14)「"漂"在地球的別一端:南非中国商城的故事」中国新聞網(来源:中国青年報)、2017年6月19日。
 - http://www.chinanews.com/sh/2017/06-19/8254279.shtml (最終閲覧日:2018年12月5日)
- 15)「南非中国商城発展記:上世紀90年代最旺 如今競争激烈」新浪財経、2018年1月1日。
 - http://finance.sina.com.cn/roll/2018-01-01/doc-ifyqcsft 8820259.shtml(最終閲覧日:2018年12月5日)
- 16) China Martの公式ホームページ http://chinamart-mall.co.za/zh(最終閲覧日:2018年12月 5日)
- 17)「南非約翰内斯堡中国商貿城挙行牌楼揭牌儀式」人民網、 2013年10月7日。
 - http://world.people.com.cn/n/2013/1007/c1002-23115681. html(最終閲覧日:2018年12月5日)

参考文献

- 丁 可 (2007): 中国の対アフリカ消費財貿易. 吉田栄一編 『アフリカに吹く中国の嵐、アジアの旋風一途上国間競争 にさらされる地域産業』アジア経済研究所, 133-159.
- バージェス トム (山田美明訳) (2016):『喰い尽くされる アフリカ 欧米の資源略奪システムを中国が乗っ取る日』 集英社.
- ハリス カレン・リー (2012): 南アフリカ. パン リン編 (游 仲勲監訳):『世界華人エンサイクロペディア』明石 書店, 634-640.
- ミッシェル セルジュ・ミッシェル ブーレ (中平信也訳) (2009):『アフリカを食い荒らす中国』河出書房新社.
- 峯 陽一編 (2010):『南アフリカを知るための60章』明石書 店.
- 宮内洋平(2016):『ネオアパルトヘイト都市の空間統治―南アフリカの民間都市再開発と移民社会』明石書店.
- 宮本正興・松田素二編(2018):『改訂新版 新書アフリカ 史』講談社.
- 山下清海 (1987): 『東南アジアのチャイナタウン』 古今書院. 山下清海 (2000): 『チャイナタウン―世界に広がる華人ネットワーク』 丸善.
- 山下清海 (2002): 『東南アジア華人社会と中国僑郷―華人・ チャイナタウンの人文地理学的考察』 古今書院.
- 山下清海(2015): モーリシャスにおける華人社会の変容と ポートルイスのチャイナタウンの地域的特色. 立命館国際

- 研究, 27 (4), 115-139.
- 山下清海(2016a):『新・中華街―世界各地で<華人社会>は 変貌する』講談社.
- 山下清海 (2016b):【書評】ハワード W フレンチ (栗原泉訳)『中国第二の大陸 アフリカーー○○万の移民が築く新たな帝国』、華僑華人研究、13、117-120.
- 山下清海(2016c):ニューチャイナタウンの形成とホスト社会一池袋チャイナタウンの事例を中心に、山下清海編『世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会一日本社会の多文化化に向けたエスニック・コンフリクト研究』明石書店、227-249.
- 山下清海 (2019):『世界のチャイナタウンの形成と変容―フィールドワークから華人社会を探究する』明石書店.
- 吉田栄一(2011):南アフリカの大都市における中国系移民 に関する予察的考察. 牧野久美子・佐藤千鶴子編『ポスト 移行期南アフリカの社会変容(調査研究報告書)』アジア 経済研究所, 105-120.
- 吉田栄一(2013): ヨハネスブルグの都市政策とチャイナタウン形成―南アフリカの中国人移民. 牧野久美子・佐藤千鶴子編『南アフリカの経済社会変容』アジア経済研究所, 213-247
- 李安山(2006):論南非早期華人与印度移民之異同.華僑華 人歷史研究,2006年9月,21-34.
- 李安山(2017): 試論世紀之交非洲華人経済的発展. 李其 榮主編『国際移民与海外華人研究』中国社会科学出版社, 311-348.
- 万暁宏 (2007): 南非華人現状分析. 八桂僑刊, 2007年第1期, 27-33.
- 周南京(1999a):南非杜省華僑聯衛会所.《華僑華人百科全書·社団政党巻》編輯委員会編『華僑華人百科全書·社団政党巻』中国華僑出版社,357-358.
- 周南京(1999b):南非杜省中華公会.《華僑華人百科全書· 社団政党巻》編輯委員会編『華僑華人百科全書·社団政党 巻』中国華僑出版社,358-359.
- Wong, B. P. and Tan C. B. eds. (2013): Chinatowns around the world: Gilled ghetto, ethnopolis, and cultural diaspora. Brill.
- Zi, Yanyin (2017): Iron Sharpens Iron: Social Interactions at China Shops in Botswana. Langaa Rpcig.

The development and transformation of Chinatowns in Johannesburg, South Africa: A comparative study of old and new Chinatowns

YAMASHITA Kiyomi*

* Faculty of Geo-environmental Science, Rissho University

Key words: Chinatown, ethnic Chinese, new overseas Chinese, China mall, Johannesburg, South Africa